

メッセージアウトライン 創世記6:1～8「人の悪の増大」

[1-2]「さて人が大地の^{おもて}面に増え始め、娘たちが彼らに生まれたとき、神の子らは、人の娘たちが美しいのを見て、それぞれ自分が選んだ者を妻とした」

神は人を創造したとき、「生めよ、増えよ。地に満ちよ…」(創世記1:28)と祝福されたが、アダムが罪を犯して以来、人が地上で増え始めることは人の悪が増大することでもあった。人間の墮落によってもたらされたものは、祝福をそのままわざわざいに変えるほどのものであったのである。1節では「娘たちが彼らに生まれたとき」とあるがもちろん息子たちも生まれたことであろう。しかし、ここではあえて「娘たち」に焦点が当てられている。2節の「神の子ら」とは誰か。これについては様々な説がある。①天使のこと。しかしこれは天使が結婚したりすることはない(マタイ22:30)という主イエスの教えと矛盾する。②人間に近い、墮落した低次元の天使。人間に近いので人間と結婚することに不思議はない。しかし、墮落しようがしまいが天使は肉体を持たない霊的存在として神に造られたので、この考えも無理。③「神の子」を神から王としての権威を与えられた地上の王たち、権力者たちとする。彼らは多くの妻をめとった。→列王記、歴代誌、エステル記等。④神に従う人々(信仰者たち)。→ローマ8:14～16, 9:8, ガラテヤ3:26, ピリピ2:15ただ神に従わないのはカインの家系であり、神に従うのはセツの家系であると区別することはできない。両者ともアダム以来の罪のゆえに墮落の道にある。しかし、そのような中でなお信仰を持って生きている者がいた。

有力なものは④であると思われるが、そのような神を知り、神を信じる信仰を持って生きているはずの者たちでさえ、神を知らず、神を信じない娘たちの美しいのを見て自分が選んだ者を妻としたと考えられる。そこにはもう神に導きを求めるのではなく、自分の思い、自分の好み、自分の感覚によって一生の問題を決定していく人間の姿がある。

好きな相手を選んで何が悪いのかと現代人は考えるであろうが、しかし、そこにこそ、この表現の意味の現代的意義が認められるのではないか。このような記述によって人間の墮落、人間の悪の深刻化が進んでいることが示されているのである。

[3]「そこで、主は言われた。『私の霊は、人のうちに永久にとどまることはない。人は肉にすぎないからだ。だから、人の齢は百二十年しよう』」

「霊」とは神から与えられたものであり、人間の人格を形成する非物質的存在。人間が死ぬと肉体と分離して神のもとに帰る。→伝道者3:21

神を信じる者が受ける聖霊のことではない。→ヨハネ7:38～39

聖書では霊とともに「たましい」ということばも用いられている。肉なる人間は神から与えられた霊なくしては生きられない存在である。

「人の齢は百二十年」とは神のさばきの執行猶予の期間とも人間の寿命の短縮とも取れるが、ここでは神に従うべきなのに従わず、ますます墮落し、悪を行っていく人間の責任が問われているので、後者の意味であろう。百二十年とは概数と思われるが、今日の人の長寿者の上限がほぼこれに当てはまる。これまでの人の長寿(5章)と比べれば驚くべき短縮である。

[4]「神の子らが人の娘たちのところに入り、彼らに子ができたそのころ、またその後、ネフィリムが地にいた。彼らは昔からの勇士であり、名のある者たちであ

った」

「ネフィリム」の語源は「ナーファル」で「落ちる」の意。ここから「墮落した者」との理解が出た。別の訳では「巨人」。民数記13:33でもカナンの地を偵察に行ったイスラエル人の斥候たちはネフィリムを見た。そして自分たちはバッタのように見えたと彼らの巨大さを報告したが、これはネフィリムのような人のことであろう。ネフィリムもまたノアの洪水で滅び、生き残ったのはノアの家族八人だけとなるのでネフィリムの子孫が後代にまで生き残っていたという可能性はない。また「神の子ら」と「人の娘たち」の結婚の結果、彼らが生まれたとも言われていない。体格が大きければ力も強く、戦いに有利であることは間違いがないので、彼らは「勇士」「名のある者」と呼ばれたのであろう。→ガテのゴリヤテを見よ。(Iサムエル17:4～11)

ネフィリムがここで言及されているのは、人のいかなる力も、神のさばき(洪水)に会えば無力で滅びてしまうということを示すためであったと考えられる。

[5-6]「主は、地上に人の悪が増大し、その心に凶ることがみな、いつも悪に傾くのをご覧になった。それで主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた」創世記1:31で、神はご自分が造ったすべてのものを見られて「それは非常に良かった」と記されているが、この6章においてはそれとは対照的で、人はここに至る長い歴史の中で、正しく生き、また正しく行う自由を、悪に進み、悪を行う自由へと変質させてしまっている。

神が「悔やまれ、心を痛められた」とは神が人の状況に左右されて、計画変更を余儀なくされたというのではなく、見通しを誤ったのでもない。これは極限に達した人間の罪への神の対応の表現(神について人間のことが語りうることには限界がある)。全面的なさばきに向かわざるを得ない神の態度とその痛みがここに描写されているのである。

[7-8]「そして主は言われた。『わたしが創造した人を地の面から消し去ろう。人をはじめ、家畜や這うもの、空の鳥に至るまで、わたしは、これらを造ったことを悔やむ』しかし、ノアは主の心にながっていた」

神は人の悪、人の罪の増大に心を痛められ、地の面から人をはじめすべての動物たちに至るまで消し去ろうと決断された。その手段は大洪水(7～8章)による絶滅である。地を従え、すべての生き物を支配するようにとの使命(1:28)をゆだねられていた人間へのさばきは、彼らにゆだねられていた他の被造物にまでおよぶのである。

「しかし、ノアは主の心にながっていた」これは簡潔な文であるが、ここに人間の罪の全くの暗やみの中での確かな希望を見る。「主の心にながっていた」とは主の恵みを得たという意味で、ノアに対する神の恵みが強調されている。彼は罪がないのでもなく、完全無欠の人であったのでもない。ただ神の恵みによって神の約束を信じ、神のみこころに従って生きることができたのである。

神は人の悪の増大とそれに続く厳しいさばきという事態の中で、ご自身の恵みによりノアを選んでくださった。ここに人間の歴史存続の希望がある。私たちも、人は神の恵みにより救いに入れられ、生かされ、守られ、導かれているということを感じ、信仰と感謝をもって従っていかなければならない。

「恵み」とはそれを受けるに値しない者に与えられる神の一方的な恩寵、贈り物、ご好意のこと。→ローマ3:23～24, エペソ2:1～5, 8～9、IIテモテ1:9